

「共生」意識の涵養と自然野外活動の経験

その1. 研究課題の考察と調査の概要

硯 川 眞 旬

1. 研究課題とその背景

現代日本における「共生」(symbiosis)に関する理解は、なお抽象的であり、情緒的に流されていると言う見方が一般的である。併せて、この概念は濫用されすぎていると指摘する識者は少なくない。^(註1)

しかしながら、「共生」と言う概念は、現代社会の基本的な諸問題を解決していく際の鍵概念となりうるとともに、その解決のために自らを行動せしめていくための「約束ごと」となり、共通の合言葉となりうる。^(註2)

「共生」概念は、人間の行動・思考・価値観を大枠において方向づけ、具体的な目標を与える。したがって、本研究で言う、この共生「意識」の質量は人間を変容せしめる「要素」と言えよう。つまり、相互の様々な文化の差異を認識・受容し、新たな生活様式を生み出す「意識」として、ライフスタイルに影響を与えることになる。この「共生意識」が本研究の中心命題である。したがって、本研究で言う「共生意識」は、トータルなライフスタイル確保のための生活改善の積極的努力の指標と捉えたい。

一方、現代人は、大自然を人間にとって都合のよい環境(小自然)へとつくり変え、人工的な利便性・快適性、快楽性の追求に余念がない。そのため、共存していくべき自然環境を破壊し続けて止まない。今日、これら実態への対応が要請されており、大自然に順応し、必要最小限に加工し利用するための賢明な考え方や感情、生き方の明確化が不可欠な状況にある。^(註3)

鑑みるに、現代人は科学技術の高度な発達につれ、自らつくり出した機械文明社会への適応を強いられ、バランスのとれたトータルな生活確保に支障を来しており、生活改善のための文化的な積極的行動が求められている。^(註4)

2. 研究の目的と仮説

本研究は、このような実態を省察し、人さながらなライフスタイルの一要素を、生涯経験の在り方における、自然野外活動経験の意義に着目し、その涵養方策を「共生意識」に焦点化し、これを生活に汎化する手立に特化して考察をする。

すなわち、精神・道徳と物質・機械との両融合、並びに文化と文明との相互依存の中で生存する現代人が、未来への継続性を視野に入れた物質志向・文明化の「さじ加減」の在り方を指し示す価値指標・生活基盤として、この「共生意識」を位置づけ、「人類の理想」の実現を志向するものである。^(註5) 特に、所謂「人間中心主義」(人間の所謂「唯我独尊」という自然に対する態度)に立脚した、自然への無限の支配欲を恣にする実態を反省して余りあろう。^(註6)

これまで人間は、自らは生態系の一部であり、人間以外の生物も独自の内的な価値をもった存在であることを認識せず、自らを自然界における最高の存在と見做し、自らの生存と欲望の満足を目的にして、すべての自然を専ら人間の必要を満たすための道具・手段としてきたことを忘れてはならない。^(註7)

そこで、これらの作動方向の逆転を通じて、現代人の社会的行為に内化していくことが要請される。つまり、大自然の一部としての人間本来のあり方、バランスのとれた人間性・生活様式への回帰が不可欠である。高度文明社会の中で、自然共生の「野生的機能」の開発とその必要性は指摘して余りある。^(註8)

なお、そのような所謂「人間中心主義」と、この対置概念である「自然中心主義」との二者択一を迫る問題設定は不毛である。そこで、本研究では人間と自然との関わりの視点を原理にして、「共生」概念を自然と共に生きる知恵、及び自然と交渉する人さながらな生活様態として捉えるものである。^(註9)

本研究は、かかる認識に立って、自然野外活動の生涯にわたる経験の成果に注目し、高齢期の健康で文化的なライフスタイル、就中「共生」意識の形成に好影響を及ぼす、生涯経験の在り方、並びにその支援・制度・政策・施設の在り方等につき調査・考察を行うものである。したがって、「自然の持つ『教育力』を活かした自然野外活動の生涯経験は、『共生意識』の形成に効果的な影響をもたらす」ということが本研究の仮説である。

3. 主たる鍵概念の規定

本研究・調査をすすめるにあたっての主な鍵概念につき定義しておく。^(註10)

(1) 「共生」(symbiosis) とは、生きるに必要な自然・環境についての知恵であり、身に付けておくべき生活に不可欠な能力である。また、自然・環境と交渉する能力でもある。更に、「文明化」の度合・ころあいを見分ける知恵であり、見えないものを見る洞察力である。^(註11)

(2) 「文化」(culture) は、人類が築いてきた生活様式であり、生活を整序し人類の理想を実現する基盤である。つまり、人間の行動・思考・価値観を大枠において方向づけ、具体的な目標を与え、人間が社会と有効に結合し、適応していく手立てであり、人間が自然に順応し、手を加え(耕作)、利用・応用することにより生まれる。

この「文化」と言う知恵により、自然を対象化(自然を利用し、人間を幸福に)する。なお、この対象化が行き過ぎると、人間の無定型な欲求充足に走り、文明化に変わる。^(註12)

(3) 「文明」(civilization) は、文化の対置概念とされ、現代社会では、機械的・物質的秩序に重点を置く向きが強い。したがって、行き過ぎた文明化は、自然史的な「人間中心主義」の自然環境破壊に向かいがちである。なぜなら、文明は、大自然を人間の都合のよいように変えていく手段・道具でもあるからである。

つまり、文明化により整備された利便性・快適性により、人間は自然性や野生性的能力が衰退しがちであり、「未来への継続性」を考えた文明化の度合が課題となる。そこで、文明と文化が相互に依存・融合されることが不可欠である。

(4) 『「共生」意識』とは、手つかずの大自然、「環境自然」や「半自然」と呼ばれる中自然、人工的なみせかけの小自然などと共生する知恵である。なお、所詮人間は加工(社会的構築)された自然環境の中でしか棲息できない。

したがって、自然の一部としての人間本来のあり方、均衡のとれた人間性への回帰が不可欠であり、高度文明化の中で、自然共生の野生的機能(所謂「生きる力」)の開発の必要性が高まるのも至極当然のことと言えよう。

- (5) 『『共生』文化』とは、文化の差異を認識・受容し、創造的共生により新次元状況を生むことと解する。すなわち、新たな生活価値・様式を生み出すライフスタイルである。取分け、現代社会においては文化の偏り（機械的・物質的な）を是正し、平和的で創造的な「共生」の普遍化が喫緊の課題となっている。この是正の方法は、諸々の文化事象を分析し、以て「創造的共生」を耕し、追求することが肝腎なことであろう。

つまり、共生文化は、健康で文化的なライフスタイル確保のための生活改善そのものであり、その努力・姿勢を含めて捉えたい。謂わば、体験知を豊かに身につけ、考え方・生活感などに改革・改善を加えあう文化である。

- (6) 自然野外活動（outdoor activities and experience in nature）については、「野外活動を含む自然活動」として捉えることとする。同時に、この活動に対して行われる教育的支援を総称して、「自然野外教育」と呼ぶこととする。^(註13)

4. 調査の方法と質問項目

本研究は、「共生意識」を担保する「生涯経験」（高齢期における経験を含む）の在り方における、自然野外活動の経験の意義に着眼をしたものであり、先行の研究文献や既存の調査データを基に仮説の立証にあたる。

就中、日本生涯自然教育協会人間環境学研究所（代表硯川真旬）によって実施された「高齢期の健康で文化的なライフスタイル（生きがい感等）に影響をもたらす生涯にわたる自然野外活動経験」の調査（2011）結果から、特に、「共生意識」に関連する因子に特化した考察をすべく、そのエビデンスを明確にし、「仮説」の立証を行う。^(註14)

本調査では、各国において取り上げられている「共生理論」を基に考察し、「共生」の具体的な要素としてと考えられるものを「共生意識」とし、これらを含む、「健康で文化的なライフスタイル」の構成要素として50項目を設定した。

この50項目の要素・意識を質問項目とし、これらの要素・意識が「自然野外活動の生涯経験」によって、どの程度涵養できうるかにつき、質問紙法・面接法の併行により実施されたものである。その50項目は次のとおりである。

なお、「」内は「共生意識」の各要素・意識を分かりやすく示すために2字単語の組み合わせにより造語したものである。それ以下は、意味あい、その英語表現、及び質問項目としての表現文の順である。

- (1) 「一視同仁」人を区別なく愛し、平等に利益を分かちあう。

Loving people without discrimination, seeking equality and sharing gain

1つしかない物は、他の人にも分けて残すよう努めてきましたか？

- (2) 「師友感恩」友や師を大切にする。

Appreciating friends and teachers

自分の事より友人や恩師の事を優先するよう心がけてきましたか？

- (3) 「面目安行」自分らしく生活する。

Being oneself

あなた流の、「自分らしい」な生活になるよう努めた日々でしたか？

- (4) 「安穩堅忍」精神的に穏やかに過ごす。

Mentally Healthy living

おだやかな日々を送るため、辛抱すべき事は辛抱してきましたか？

- (5) 「歡喜躍如」気持ちよく喜ばしく楽しい生活をする。

Enjoying life and having fun

「毎日が楽しい」と、心から思える「これまでの生活」でしたか？

- (6) 「道理道德」規律、道德を守る。

Concern for discipline and morality

いつも、きちっとした規律・道德心をもって生活してきましたか？

- (7) 「安心用行」心配事に対処する。

Handling worry effectively

抱え込んだ「心配事」はうまく処理しながら暮らしてきましたか？

- (8) 「自己実現」自己実現をめざす。

Self-realization, self-knowledge

自分の適性をよく知って希望や理想を叶えるよう努めてきましたか？

- (9) 「鬱積調節」ストレスなどを調節・調整する。

Control of stress

ストレスの調節・調整は、いつもうまくなってきましたか？

- (10) 「人愛親切」愛情をもって人に接する。

Treating other people with love and kindness

人に対して、いつも「やさしく」できる日々でしたか？

- (11) 「寛大寛容」寛大さ、寛容さをもつ。

Tolerance and broad-mindedness

「人の過ち」を寛容に許せるよう、努めることができてきましたか？

- (12) 「致知求是」自己の気づきを活かす。

Application of knowledge gained from selfawareness

自分の性格をよく知って、それに対応しつつ暮らしてきましたか？

- (13) 「修身克己」自己を深くみつめ、自己を知る。

Self-reflection, self-knowledge

「自分」というものを、いつも深く見つめ直すような生活でしたか？

- (14) 「生死受容」死に向き合う。

Acceptance of death

いつも、自分の死について真剣に考えることが多い生活でしたか？

- (15) 「暗愚自責」自責の念をもつ。

A sensitive conscience

「自分はダメな人間だ」と反省することがたびたびありましたか？

- (16) 「先祖供養」祖先・先人の供養。

Respect for ancestors

ご先祖様や故人の供養は、本心から懸命につとめてきましたか？

- (17) 「報本反始」自然や神仏への敬意、感謝。

Respect and gratitude for nature and the divine

太陽の恵みや神仏のことについて、よくお考えになる生活でしたか？

- (18) 「意気軒昂」積極的で意欲みなぎる生活への意気込み。

Positive and energetic approach to life

暮らしのパワーや生活熱意が、盛んなあなただったでしょうか？

- (19) 「苛虐絶無」虐待やいじめは絶対にしない。

Avoidance of abuse or bullyin

「児童虐待やいじめは絶対にしない」と言う確信ある生活でしたか？

- (20) 「生物愛護」生き物を大切にする。

Care for living things care

動物や植物等生き物を大事に、心から可愛がってきましたか？

- (21) 「喫煙忌避」タバコは吸わない。

Avoidance of smoking

これまで、タバコは吸わない生活をなさってきましたか？

- (22) 「適正飲酒」適正な飲酒。

Moderation in liquor consumption

これまで、酒はお飲みにならない生活を過ごしてきましたか？

- (23) 「休養身命」適宜の休養をとり、養生する。

Appropriate rest and relaxation

適宜、「休養」をとり、無理のない生活に心がけてきましたか？

- (24) 「天然無為」できるだけ文明の利器は使用しない。

Avoiding elevators and other devices that alleviate the need for physical exertion

エレベーターやエスカレーターは使わないようにされてきましたか？

- (25) 「適切飲食」適切な食事・栄養に心がける。

Eating well and getting proper nutrition Eating

日ごろから、適切な食事・栄養をとるように心がけてきましたか？

- (26) 「運動習慣」スポーツ・運動の習慣。

Regular exercise regular

昔から、スポーツや健康体操、散歩などを続けてきましたか？

- (27) 「寛柔趣味」心身ともにリラックスできる趣味をもつ。

Having hobbies that are mentally and physically relaxing

「気休め」になるような趣味を持って、暮らしてきましたか？

- (28) 「安眠留意」安眠に心がける。

Getting sufficient sleep

日ごろから、シッカリとした睡眠に、心がけてきましたか？

- (29) 「健康認得」不健康な生活習慣・態度についての認識。

Awareness of unhealthy habits and attitudes

健康によくない生活習慣・態度をいつも気にしつつの生活でしたか？

- (30) 「体質熟知」自己の体質の熟知。

Knowledge of one's own body

自分の体質や素質をよく知って、適切な生活に努めてきましたか？

- (31) 「近隣交流」町内の交流に積極的に参加する。

Participating actively in the community participating

町内会や隣近所の方々との交流は快くつき合ってきましたか？

- (32) 「環境汚染」環境を汚さない生活をする。

Living without polluting the environment

環境を汚さぬように、自分の生活をよく見直しつつの生活でしたか？

- (33) 「一家団欒」家族で集まって和やかな時を過ごす。

Spending pleasant time with family Spending

「家族の団らん」づくりに大変努力をしてきた、これまででしたか？

- (34) 「経済倫理」便利さだけを求めず工夫し、手づくりの生活を心がける。

Enjoying making things by hand rather than seeking convenience

便利さだけを求めず工夫し、手づくりの生活に心がけてきましたか？

- (35) 「公德礼儀」公衆道徳、礼儀をわきまえた言動。

Following accepted moral principles and being courteous

公衆道徳やお互いの礼儀に気がつかった生活を送ってきましたか？

- (36) 「自然畏敬」自然を畏敬し、感謝する。

Respect and gratitude for nature

自然をおそれ敬い、自然に感謝する毎日を送ってきましたか？

- (37) 「天変察知」天候や季節など身近な自然の変化を察知する。

Awareness of changes in climate, seasons, and the nearby natural environment

雨風、雪、雷などをいつも気にかけるような日々の生活でしたか？

- (38) 「自然慎思」ものかね志向のマイナス面をよくよく考える。

Understanding the bad effects of environmental damage and materialism

公害や過労死の発生につき、それを防ぐよう心がけてきましたか？

- (39) 「沐浴家常」自身と身の回りを整え、清潔を保つ。

Keeping one's person and surroundings clean and neat

掃除、身の回り整理整頓、体の清潔に日頃から努めてきましたか？

- (40) 「金品儉約」物を大切にし、無駄遣いをしない。

Taking care of things, avoiding waste

物を大事にお金は儉約するというような生活をされてきましたか？

- (41) 「悪口不言」悪口、陰口を言わないかわり方をする。

Not speaking ill of people or engaging in gossip

人の悪口や陰口は言っではいけないという考えでの生活でしたか？

- (42) 「惻隱敏行」困っている人を助けたいという気持ちが自然にわきでる。

Having a natural desire to help others having

人が困っている時、いても立ってもいられぬ気持ちになりましたか？

- (43) 「公序良俗」道義にもとる行為はしない。

Avoiding immoral action

汚職・賄賂はしてはいけない、という信念で過ごしてきましたか？

- (44) 「社会連携」社会の一員として社会とのつながりをもつ。

Maintaining a connection with society

これまで、選挙や共同募金などに積極的に参加をしてきましたか？

- (45) 「無欲懇切」思いやりや親切を大切にする。

Being sympathetic and kind

ものやお金より、人の親切を大切にするように心がけてきましたか？

- (46) 「反正奮励」社会の中で起こっている間違いを正すよう、勇気をもって喚起する。

Acting courageously to correct wrongs in society

世の中の間違いに対して、勇気をもって正すような日々でしたか？

- (47) 「光陰刻苦」時間を大切に、時間を守る。

Respecting time and being punctual

時間を大切に、必ず時間を守るという暮らしに心がけてきましたか？

- (48) 「広益推譲」ボランティア活動をする。

Participating in volunteer work

ボランティア活動を通じ社会と広くつながるよう努めてきましたか？

- (49) 「自発進取」自主的、自発的に物事に取り組む。

Acting independently and spontaneously

「指示待ち」ではなく、自から進んで挑戦するような生活でしたか？

- (50) 「人権尊重」人権の尊重や命の重さを感じ生活する。

Awareness of the sanctity of human life and the importance of human rights

お互いの人権を尊重し、命の重さについてよく考えた生活でしたか？

5. 調査の実施と解析

調査は、2011年3月11日から9月1日にかけて実施した。調査対象は、戦後新制教育に就学した、調査時60歳以上70歳未満の者とした。

その理由は、(1)この世代の者の義務教育就学は、独占資本の拡大準備期(1949～1956年)である。即ち、この時期は国民生活が漸次安定し始めるものの、消費者物価の上昇がみられる等資本主義的矛盾が露呈し始め、経済変動が顕著となる直前の段階である。(2)工業化、過疎・過密化が漸次始まるとともに、自然の乱開発や青少年等の道徳頹廃、ものかね志向、知育偏重等が危ぶまれ始める時期である。(3)一般的な定年退職年齢(年金受給開始)帯であり、65歳「高齢期」に入るまでの準備期から高齢期生活経験の開始年齢帯である。

すなわち、現役生活の集約とシニア生活への橋渡しに取り組まねばならない身の上である。

- (4)この時期は、米国民主義に基づく新教育制度が機能し始める時期である。

調査対象は、前掲調査期間に開催された、(1)自然野外活動及びスポーツ活動関係の講習研修の会合、(2)生涯教育の講座・学習の会合等への参加者とした。

合計 360 人に調査票を配布し、持ち帰り後の郵送回答を依頼したところ、回収できたのは 263 人であった（回収率 73.1%）。対象年齢外の者や回答に不備があった者を除いた 227 人が本研究の対象となった（全体の 63.1%）。

なお、すべての調査対象者に対して、本研究の趣旨を伝え、研究参加の同意を得て実施した。

さて、本調査データに関する因子分析を行った結果、5 因子が抽出された。その 5 因子は、(1)精神面、(2)スピリチュアル面、(3)身体面、(4)環境面、(5)社会面と、それぞれ名づけた。

その結果、特に(4)の環境面（特に、正義感・前向き志向）において、自然野外活動経験者が未経験者より有意に高い得点を示した（ $p < 0.05$ ）。また、自然野外活動経験者が、(1)の精神面（特に、ストレス回避能力）、(3)の身体面（特に、健康的な生活習慣）において有意に高い得点を示した。

質問紙の回答結果から SPSS19.OJ for windows（IBM SPSS JAPAN. 東京）を用いて探索的因子分析を行った。探索的因子分析では、質問項目の背後にある共通因子を探索することを目的とし、指定された因子負荷量の大小から、共通因子の解釈ができる。なお、有意水準を 5%未満とした。

高齢期の「共生」意識（健康文化的ライフスタイルのコントロール度）に及ぼす自然野外活動の経験について(1)因子ごとに検討した結果、自然野外活動の経験により期待される能力は、特に、第 4 因子の環境面（特に、正義感・前向き志向）において、経験者が未経験者より有意に高い得点を示した。したがって、この「正義感・前向き志向」因子について、自然野外活動の経験による「強み」（得意な獲得能力）として期待できよう。

また、自然野外活動の経験による効果としては、第 4 因子環境面、特に「正義感・前向き志向」以外の因子については、あまり高まらない可能性がある。

更に、「前向き志向」が培われる要因については、例えば自然野外活動における冒険・挑戦プログラムの経験の成果が考えられる。即ち、危険・困難に立ち向かう自我の拡大（自己の可能性・価値の認識等）を促進し、主体的・積極的な参加態度を培っていくものと言えよう。

どちらにしても自然野外活動経験の効果については、「共生意識」のうちでも、

環境面、特に「正義感・前向き志向」（人間尊厳など）において「有効」であることはまちがいなからう。

なお、調査結果の解析にあたっては、佐藤広徳氏並びに難波秀行氏の協力を得た。

6. 考察と期待される結果

更に詳細なる考察については、文献研究とも相俟って、現在、鋭意進めているところである。^(註15)

期待される結果としては、(1)自然野外活動の生涯経験によって得られる「共生意識」の要素が明らかになる。(2)自然野外活動の永年経験の有無による、「共生」意識の生涯形成（担保）の差異が判明する。

この方面の研究実践は皆無に等しい。その啓発・発展のために、いかに貢献をしていくかが今後の課題である。^(註16)

注 記

- (1) 吉田傑俊ほか編、共生思想の探究、青木書店、2002.
- (2) 庄司興吉編著、共生社会の文化戦略、粹出版社、1999.
- (3) 硯川眞句、仏教野外教育論、八千代出版、1997.
- (4) 森田勇造、野外文化教域としての体験活動、三和書籍、2010. 降旗信一、現代自然体験学習の成立と発展、風間書房、2012.
- (5) 三浦清一郎編、現代教育の忘れもの－青少年の欠損体験と野外教育の方法学文社、1987.
- (6) 硯川眞句、子どもの野外活動を考える、村上尚三郎編、福祉教育を考える、勁草書房、1994.
- (7) Suzurikawa S. ; An Introduction to Buddhist Group Work, The Japanese Society For the Study of Social Welfare JAPANESE JOURNAL SOCIAL SERVICES, 1, 1997.
- (8) 塚本珪一、自然活動学のすすめ、岳書房、1980.
- (9) 硯川眞句、青少年の野外活動における「宗教的情操」の教育・涵養、佛教大学仏教社会事業研究所 仏教福祉 15, 1989. 硯川眞句、子どもの福祉と野外活動、教化リサーチ、浄土宗文献センター、1995.
- (10) 硯川眞句監修、国民福祉辞典、金芳堂、2006.
- (11) 尾関周二ほか編、農と共生の思想、農林統計出版、2011.

なお、椎尾弁匠師の「共生」概念については、現代社会において「共生」論が思想的

な課題となり、そのなかで再発見されたものとされ、現代における「共生」とは異質の脈流として捉えるのが一般的である。(亀山純生、共生理念の深化と仏教思想の“参時点としての意義”、吉田傑俊ほか編、前掲書所収。)

椎尾弁匡師の文献としては、共生教本、財団法人共生会、1962。浄土教は社会教なり、財団法人共生会、1965。共生の基調、財団法人共生会、1929。仏教哲学、大東出版社、1935。共生講壇、財団法人共生会、1925。有信有業の教育、共生会出版部、1935。ほか参照。

また、椎尾師が縁起論に基き、仏教の社会的実践を「共生」と初めて命名した思想史的意義は大きい。(芹川博通、共済主義と共生主義、小林孝輔ほか監修、福祉と仏教－救いと共生のために、平凡社、2000。)

なお、本研究において、特に、調査票の質問事項（「共生」意識の要素（内容））の設定に際し、椎尾弁匡師の共生思想にあらためて学び、存分に参酌し、質問項目の確定にあたった。

- (12) 庄司興吉、前掲書。佐伯胖ほか編著、共生する社会、東京大学出版会、1995。
岡本包治、文化とふれあいのまち、ぎょうせい、1990。浜本隆志ほか、文化共生学ハンドブック、関西大学出版部、2008。文化論研究会、文化論のアリーナ、晃洋書房、2000。
- (13) Smith J. W., Outdoor Education, rev. Washington, D.C. AAHPER, 1970.
- (14) Suzurikawa S.; Lifetime of Outdoor Activities in Nature and the Development of a Healthy and Cultured Lifestyle. 日本福祉図書文献学会 福祉図書文献研究 11. 2013.
- (15) Suzurikawa S.; An In-depth Review of the Human Perspective in Modern Society-Part 2 : Consideration on the Proper Human Perspective and the Conceptual Image of Human in Regard to Health and Medical Care. Bulletin of the Research Institute of Bukkyo University, 1998.
- (16) Suzurikawa S.; An In-depth Review of the Human Perspective in Modern Society: Medical Care Issues Considered as Human Rights Issues. Bulletin of the Research Institute of Bukkyo University, 1997.

キーワード 共生、文化、文明、自然野外活動

(すずりかわ しんしゅん 日本生涯自然教育協会会長・元熊本大学大学院教授)